
落武者伝説殺人事件

ともゆき

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

落武者伝説殺人事件

【Nコード】

N7671B

【作者名】

ともゆき

【あらすじ】

夏休みを利用して里帰りをした大神。だが、そこで殺人事件が発生！そして行方不明になるアイリスと紅蘭…。果たして本当に事件は「落武者の呪い」なのか？

プロローグ

花咲く 乙女たち 未来を抱きしめて
麗し美空に 金色の世界 夢を見るわ いつも愛の夢

熱い 想い この身を焦がし たとえ あした 命尽きても
歌い 踊り 舞台に駆けて 君にとどけ 今宵高鳴る その名

…… 帝國歌劇團

歌い 踊り 舞台が跳ねて 君にとどけ 今宵高鳴る その
名……

「本日は大帝國劇場にご来場くださいました。有難うございました。
本日の舞台はこれにて終了でございます。又のお越しをお待ち申し
ております。尚、お帰りの際は忘れ物落とし物の無いようにご注
意くださいませ」

場内アナウンスが響く。

太正12年7月。千秋楽公演を終えた帝國歌劇團・花組。

「あー、終わった終わった。無事に千秋楽が終わったぜ」

「本当ですね。何事もなく終わってよかったですね」

桐島カンナを先頭に楽屋に入ってくる團員。

「お疲れ様。みんないい演技してたわよ」

「何事もなく終わってよかったよ。お疲れさん」

楽屋では大神一郎と藤枝あやめの二人が出迎えていた。

「明日から一週間の夏休みだもんな。みんな気合いの入れ方が違
うぜ」

明日から一週間花組は夏休みを取るのだ。当然その間は休演であ

る。

「…で、みんな明日からどうするつもりなの？」

化粧を落しながらマリア・タチバナが聞く。

「あたしは友達の家に遊びにいこうと思ってるんです。泊まり掛けで来ないか、って前から誘われてたんですよ」

「わたくしは尋常小学校の同窓会で熱海に出掛けますわ。わたくしもさくらさんと同じく泊まり掛けの予定ですよ」

「あたしも二、三日修業に行ってくるぜ。…で、マリアは？」

「うん。私も友人の家に行く予定があるのよ」

真宮寺さくら、神崎すみれ、カンナ、マリアの四人はどうやらもう予定が決まっているようだ。

「何や。まだ決まってないのはウチだけか」

「アイリスも何するか決めてないよ」

李紅蘭とアイリスが言う。

「…じゃあ、オレと一緒に実家にも行くか？」

大神が言いだした。

「え？ お兄ちゃんの実家？」

「うん、ここ一年ほど帰ってないからな。せつかくの機会だから里帰りしようと思ってるんだ」

「じゃあアイリスも一緒に行く。お兄ちゃんの生まれたところ見た

ーい！」

「ほなウチも大神はんと一緒に行くわ」

「よし、決まったな」

「…じゃ、私も大神くんと一緒に行こうかしら」

隣で話を聞いていたあやめも言いだした。

「あやめはんまで…。何でまた？」

「うん。前々から一度大神くんの御両親に御挨拶しようと思ってたのよ。大神くんが里帰りするって言うなら、この機会だから御両親に会ってこようかしら」

*

翌朝、上野駅。

これから出かける4人を米田と「折角だから行くついでに」と花組を代表してカンナが見送りに来ていた。

「じゃ、支配人。言ってます」

「ああ、気をつけてな」

米田が言う。

「アイリス、あんまりワガママ言うんじゃないぞ」

カンナが言う。と、

「わかってるよ！」

やがて発車のベルが鳴り、蒸気鉄道が走り出した。

「気をつけてなー！」

カンナが手を振る。

*

上野駅を出発した蒸気鉄道は東北本線を北上していた。

車内で大神が話したことによると、大神が生まれたの栃木県にある小さな村だという。大神はそこで15歳まで過ごし、その後江田島の海軍士官学校に進んだ、という。

やがて大神たちの乗った蒸気鉄道はある駅に到着した。

「…ずいぶん変わったなあ…」

駅を出た後に、回りを見回して大神が言う。

「変わったってどういうこと？」

アイリスが聞く。

「いや、前に来た時はその辺に店なんかなかったんだよ。このへんも少しずつ開けてきたんだな」

「…で、大神はん。その大神はんの生まれたいう村は何処にあるんや？」

紅蘭が聞く。

「そつだな。ここから一時間も歩けば着くかな？」

「い、一時間？」

「アイリスそんなに歩くのやだよー！」

「冗談だよ。ほら、あそこに蒸気タクシイの乗り場があるじゃないか」

確かに大神の指差したところには何台かの蒸気タクシイが停車しており、「タクシイ乗り場」と看板が立っていた。

「…なんや。それなら最初から言ってくれや」

タクシイで15〜6分も走っただろうか。

「あ、このへんでお願いします」

大神が言くと蒸気タクシイが道端に停車した。

「じゃ、お金は私が払うから先に降りてて」

そう言つとあやめは先に三人を降ろした。

「ほら、あそこだよ。オレが生まれた村は」

大神が指を差す。そこはのどかな田園風景だった。夏ということもあつてか、田んぼの稲が青々としている。

「なんかのどかそうな所やな」

「…そうでもないんだ。最近はこのうちのほうも、いろいろなものが帝都から流れてきているらしいんだ。親父とお袋が送ってくれた手紙にそう書いてあつたよ」

「蒸気タクシイがあるくらいやからな。このへんもだんだんと変わりがつつあるんや」

「…さ、行くか」

大神たちは荷物を持つと歩きだした。

(第1話に続く)

第1話

「親父、お袋。いるかい？」

「大神」と表札の掛かっている家の前。

大神が玄關の前で呼ぶと、五十前後の男が大神を出迎えた。

「おや、誰かと思ったら一郎か。お帰り」

どうやらこの男が大神の父親のようだ。

「一体どうしたんだ？」

「いや、今日から1週間の休暇だから。たまには親の顔を見に来ないとな。…ところで、お袋は？」

「いまそこへ買物にいったよ。じきに帰ってくるだろ」

大神の父はあやめたちに気付くと、

「そちらの女性は？」

「あ、大神くんのお父様ですね。初めまして。私、大神くんの上官で藤枝あやめと申します。…で、こちらの二人が歌劇團の團員の李紅蘭と、アイリスです」

あやめが二人を紹介する。と、紅蘭とアイリスの二人は会釈をした。

「ああ、華撃団の話は一郎から聞いてますよ。…ま、とにかく中へ入ってください。冷たいものもありますので」

そして4人は家の中に入った。

*

やがて大神の母親も戻ってきて、ひとまず挨拶を済ませると大神たちは長旅の疲れを癒すかのようにくつろいでいた。

大神とあやめは両親に歌劇團の事を話し、アイリスは庭で遊んでいて、その様子を紅蘭が見ていた。

「アイリス〜！ 西瓜御馳走になろうでー！」

紅蘭が庭で犬と遊んでいたアイリスに呼び掛ける。

「うん」

そういつとアイリスは中に入っていった。

「でも珍しいなあ。ワコはめったに他人になついたりしないのに、アイリスにすっかりなついちゃってるよ」

大神が言う。

そう、大神家で飼っている犬はすっかりアイリスになつてしまいい、さっきまでアイリスはずっと遊んでいたのだった。

「アイリス、動物好きだもん」

「そうだな、ジャンポールがいるもんな」

アイリスは「親友」と言っている熊のぬいぐるみのジャンポールを片時も手放したことがなく、ここに来る時もしっかりと連れてきていた。

と、紅蘭が、

「ところでな、大神はん」

「ん？ どうしたんだい？」

「さっきから人の行き来がその道であるんやけど、あれ何や？」

みると大神の家の前をさっきから村人達が行ったりきたりしていたのだった、

「ああ、もうそんな季節か…。実はこの近くの神社でお祭りがあるんだ」

「お祭り？」

「…うん。でもただのお祭りじゃないんだ」

「…ただのお祭りじゃない、ってどういうことや？」

「何て言ったらいいのかなあ…、慰霊のお祭りなんだよな」

「慰霊？」

「ああ、実はこの村にはね、戦国武将の落武者伝説があるんだ」

「落武者伝説？ ……どんな話なんや？」

「うん…、これはこの村に古くから伝わる話なんだけどな、今から三百五十年近く前、戦国時代のことなんだ。山崎の合戦で羽柴秀吉

に敗れた明智光秀の軍勢の生き残りがこの村まで流れてきた、って言うんだ。村の人々は最初の頃は手厚くもてなしたんだけど、だんだんと食物が不足してきたんだ。悪いことに村は凶作に見舞われて自分たちの食事にも事欠く有様で村人たちは意を決するとその落武者たちを皆殺しにしたんだ。しかもその殺した落武者の首を晒しものにしたらしいんだ」

「そんな殺生な…」

「…でも、話はこれだけでは終わらなかった。それからというものは他の村が豊作なのにこの村だけが凶作だったり、悪い病気が流行ったりと悪いことが次々と起こったんだ。それはもしかしたら殺された落武者の祟りじゃないか、と恐れた村人はその落武者をちゃんと埋葬して神社を作り、慰霊の舞を踊った。そういうことをしたからか、それから祟りは起こらなくなった、という話さ。その神社が建っている場所と言っているのがその落武者の首を晒しものにした、という場所と言われていて、その神社で落武者達を祀っているんだ。で、年一回、その落武者を慰霊するお祭りをするってわけさ。他にも秋の収穫祭や新年を祝うお祭りもやるから、このあたりじゃ有名な神社なんだ」

「祟りねえ…。なーんか非現実的な話やなあ…」

「どこにもそういう伝説、ってあるわよね。平家の落武者とか九郎判官義経の北方伝説とか…。大神くんの村にもあるのね。そういう話が」

あやめが言う。「判官轟肩」という言葉があるが、アレは「義経は実は衣川を逃れ、蝦夷地（北海道）から大陸へと渡った」という「義経北方伝説」が基になっているのだ。

「その祭りが明後日あるんですよ。よかつたら見物なさったらどうです？」

大神の父親が言う。と、

「アイリス、そのお祭り見てみたいな」

「…そうだな。帝劇に帰るのは3日後だから、祭りを見物する時間

は十分にあるな」

*

それから間もなくの時だった。

「近所で聞いたら帰ってきてる、って言うから」

と、二人の男が大神の家の玄関にやってきた。

「誰かと思つたら、西田と横川か」

そついいながら大神が玄関に行く。

「一体いつ頃までいるつもりなんだ？」

「そつだなあ…、2、3日はいるつもりなんだけど」

「ふーん。それじゃあ祭りの間はある、って事だな」

「アイリスが見たい、って言うてるからな。そついうことになるかもな。それがどうかしたか？」

「いや、折角だからさ、お前にも手伝ってもらおうかと思ってさ」

「それは別に構わないけど…」

「そつか。じゃ、早速で悪いんだけど、今夜神社の近くの集会所に来てくれないか？ 色々と打ち合わせをしたいんだ」

「わかつた」

そついうと二人の男は玄関を出て行った。

「なんだ、一郎。折角帰ってきたんだからゆっくりしていればいいのに」

大神が「今夜集会所へ行って来る」と言つと父親はそつ言った。

「仕方ないよ。友達の頼みだしな。それに、親父なんかよりもオレの方が役に立つんじゃないの？」

「いらんこと言うな！」

「ハハハ、親父ゴメン。替わりにお袋と一緒にあやめさんたちの相手をしてくれよ」

「わかつたよ」

*

そしてその夜。

「じゃあ、言ってくるから」

「気をつけて」

そして大神が家を出て、集会所に向かった。

集会所は神社のすぐ近くにあるので大神は神社へ向かって歩いていった。

祭りが明後日開かれる、と言うことからか、あちこちで準備を進めている人たちを見た。

そして集会所近くに来た時だった。

「…？」

道端に摘んだばかりと思える花が飾られてあったのだ。

「…これは？」

大神は一体その花が何なのか疑問に思いながら集会所に向かった。

*

大神が集会所の中に入ると既に何人かの村人達がいた。

「あれ、大神さんのところの…」

「いつ帰ってきたんだい？」

「いや、今朝なんだけどね」

「ああ、すみませんなあ。折角帰ってきたばかりのところを」

「いいんですよ。自分も動いているほうが好きですから」

と、昼にやってきた大神の友人の西田が、

「大神、こつちへ来い」

と、大神に座布団をすすめる。

「…おや、誰かと思ったら大神か」

丁度大神が座った隣に座っていた男が大神に話しかけた。

「…誰かと思つたら田村じゃないか」

そう、その男も大神の友人だった。

「いつこつちに戻ってきたんだ？」

「いや、今朝着いたばかりさ」

「そうか…、着いたばかりのところ悪かったな」

「いや、オレもこうやって動いていた方が好きだからな」

そして集会が始まり、あさって行なわれる祭りについての打ち合わせが行なわれた。

その打ち合わせがひと段落ついたときだった。

「…そういえばもう、あれから1年になるんだな…」

不意に村人の誰かがそういった。

「あれ、って何があつたんですか？」

大神が近くにいた村人に聞いた。

「ああ、大神さん所の息子は東京に行つてたからわからないか…。いやね、田村さんところの娘が亡くなつてそろそろ1年になるんだな、ってね」

「娘、って…。お前の妹か？」

大神が田村に聞いた。

そう聞かれた田村は何も言わず頷いた。

「…一体なんで…」

「ちよつとそれは…」

そういうとその村人は黙り込んでしまった。

と、田村が、

「いいんですよ。もう1年経っているし。…実は自殺したんだよ」

「自殺だつて？」

思わず聞き返す大神。

「ああ。丁度去年の今頃、夏祭りが終わつてすぐの頃だったけど、この近くの木で首を吊つたんだ。お前は東京にいたからわからないだろうけど、凄い騒ぎだったんだぜ」

「親父もお袋もそんな話はしなかったけどなあ…。時々こつちから来る手紙にも書いていなかったし」

「そりゃお前には直接関係はないことだからな」

「…じゃあ、ここに来る途中の道においてあつた花は…」

「そういうことになるな」
そんなことがあったとは夢にも思わなかった大神はただ黙っているだけだった。

そして打ち合わせは1時間ほどで終わり、解散となった。
その帰る途中の道で大神は来る時も見た道端においてある花を見る。

来た時はわからなかったが、理由を知った今ではまた別の気持ちになってくる。

田村の友人と言うことで大神も彼の妹については知っているが、村でも評判の明るい娘だったはずだ。そんな彼女が何故自殺なんかついたのだろうか？

「ふうっ…」

大神はひとつため息を吐くと、家に向かって歩き出した。

*

「ただいま」

大神が家に入ると、

「あ、お兄ちゃん、お帰り」

アイリスが大神を出迎えた。よく見ると手ぬぐいを持っている。

「…なんだ、今から風呂に入るのか？」

「うん、紅蘭と一緒に。紅蘭！」

「わかっとなるわ。せかさんといてや」

そう言いながら紅蘭がやってきた。

「その廊下の突き当りが脱衣所だから」

「わかったわ」

そして二人は脱衣所に向かっていった。

居間に入るとあやめが縁側で涼んでいた。

「あら、大神くん、お帰りなさい」

「今帰りました」

そういつと大神はあやめの傍に座る。

「…どうしたの、大神くん？ 何かあったのかしら」
「え？」

思わずあやめの顔を見る大神。

「だって出かける前と、今では全然顔つきが違っているんですもの。集会所で何かあったのかしら？」

大神は一瞬、「あのこと」を話すべきかどうか躊躇した。
でも相手はあやめである。彼女ならば色々な意味で信頼が置けるだろう。

「…いや、実はですね…」

「…そんなことがあったの…」

大神から話を聞いたあやめも複雑な表情だった。

「自分も田村の妹のことはよく知っているんですけど、とても自殺なんかするような子じゃなかったんですけどね…」

「でも結果的には他人の気持ちなんてわからないものよ。その彼女が一体どんな理由があつて自ら命を絶つたのか、なんて私達にはわからないわ」

「そうですね。それにもう一年も前の出来事ですし…」

暫くの間二人は沈黙していた。と、

「いやあ、ええ風呂やったわ」

「本当だよね」

紅蘭とアイリスが風呂から上がったようだ。

そして大神とあやめがいる部屋に戻ってきた。

「どうしたんや、二人とも？ なんか辛気臭い顔して」
「ん？ いや、なんでもないよ」

「いやあ、それにしてもええ風呂やったわ。…あやめはんも入ってきたらどうや？」

紅蘭があやめに勧める。

「…そ、そうね。じゃ大神くん、私も入ってくるわ」

慌ててあやめも作り笑顔をするとそう答えた。

「お兄ちゃん家のお風呂って木で出来てるんだよ」

「そう。純和風、ってことね」

そう言つとあやめは着替えを取りに部屋に向かおうとしたときだった。

「あ、大神はん、ちよつと…」

*

浴室の格子窓から湯気が立ち上っている。

「…間違いないな」

「…ああ。今、あのあやめ、って女が入ってるぜ」

物陰に隠れてよからぬ相談をしている二人の男がいた。

大神の友人の西田と横川の二人だった。

二人は物音をたてないように浴室に近付く。

「しかしよお…、あのガキと眼鏡の娘はとにかく、大神の野郎にあんな美人の上官がいるなんて犯罪だよなあ」

「いや、あんな美人が軍人ってコト自体がもう犯罪だぜ」

もうここまで書けばお解りだろう。ふたりはこれからあやめが入浴しているところを覗こうとしているのだ。いつの時代にもこういうヤツがいるものである。

二人は格子窓の側まで来た。

そして格子窓に手を掛けるとそつと頭を上げた。

次の瞬間、二人の顔に熱湯がふりかかった。

「あつちやあ！」

…どうやらあやめは感付いてたようである。

二人は大急ぎでその場を立ち去った。と、

「おまえたち、何やってんだ？」

「お…大神！」

そう、なぜかそこには大神が立っていたのだ。

「まさか、あやめさんが入浴しているところを覗こうとしていたんじゃないだろうな？」

「そ…そんなこと…」

「ははあん、凶星…か」

「そう…というお前こそなんでここにいるんだよ？」

「いや、紅蘭が『風呂からあがるうとした時に誰かに見られている感じがした』って…って…って…たんでね。それであやめさんが『ちよつと見張っててくれ』って…って…って…たんでね。それにしても、残念だったな。あやめさんはあれで物凄く勘がいいんだ。おまえらが覗こうとしてもそんなのお見通しだ…よ？」

大神は言葉に詰まった。そして、縁側のほうを見る。

何やら人影が通ったように見えたのだ。

次の瞬間、

「キヤーツ！」

今の方から叫び声が聞こえた。

「どうした？」

叫びながら大神が今へ向かった。

今に飛び込むとアイリスと紅蘭が部屋の隅で縮こまっていた。

「アイリス、紅蘭。何があつたんだ？」

「い、今、誰かが通りかかったんや…」

「通りかかった？」

「そ、それが何だか鎧のようなものを着ていて…」

「鎧だつて？」

「一体どうした、つて言うの？」

叫び声を聞いて慌てて風呂から上がったか、あやめも着ていた寝巻を整えながら部屋に入ってきた。

「あ、いえ、その、アイリスと紅蘭が鎧武者のような人影が通りかかったつて…」

「鎧武者、つて…」

「確かにこの目で見たんや。な、アイリス？」

「う、うん。確かに鎧みたいなのを着てて、こっちの部屋を向いた

んだよ
「

…だとしたら、何でそんな事を…」

「とにかく、詳しい話を聞かせてもらえるかしら？」

（第2話に続く）

第2話

「…で、その状況を詳しく教えてくれないか？」

居間。大神と紅蘭とアイリスに話しかける。

「うん。丁度ウチとアイリスがそこで涼んでいた時や。お祭りが近い言うことでこの家の前にも色々と人が通りがかったんやけど…」

「まあ、確かに明後日がお祭りだからね」

「それで人通りが少し少なくなった、思ってたら突然変な格好をした人が通りかかったんや」

「変な格好？」

「勿論最初はどんな格好かわからなかったわ。でもよく見ると鎧武者のような格好をしておったからなんか変や思ってたんや。あんな格好して出歩く日なんておらんやろ？」

「…確かにそうだな」

「最初はその、大神はんの言うお祭りの余興か何か思ったんや。でもそれには何だか様子が変や思つて、アイリスと話しとつたらその鎧武者が突然ウチらのほうを向いたんや」

「…それである悲鳴、と言うことになるのか」

「そういうことやな」

「うーん…」

「そういうと大神は考え込んでしまった。」

「…どうしたの、大神くん？」

「あやめが聞く。」

「…だとしたら、何で犯人はそんな事をしたのか、と思ひまして「そんな事？」

「はい。大体そんな事をしたって意味がありませんし、大体何の目的があつてそんな事をしたのか、もわかりませんし…」

「誰かを驚かそうとしてやったこと、とかは考えられない？」

「だとしてもそんな目立つような格好で出歩くなんて普通の神経じゃ考えられませんよ。それに、鎧武者の格好と言ったって戦国の頃じゃあるまいし、そう簡単に入手できるものではないでしょう?」
「…確かにそうは考えられるけれど…」
「どっちにしろ不可解としか言いようがないですね」
「…確かにね。目的も何もわからないようでは私達だけではどうしようもないことね」

あやめがそういうとその場に沈黙が流れた。

「…とにかく、もう今日は寝なさい」

「…わかりました」

「お兄ちゃん、お休み」

「ああ、お休み」

そう言うつと紅蘭とアイリスはあやめを含めた三人のために用意された寝室へ行った。

*

その翌朝のことだった。

「大神さん、大神さん!」

大神に家の玄関の前で声が聞こえた。

「…どうしたんですか?」

丁度起きていた大神が玄関に顔を出す。

「あ、神社の方で騒ぎが起こって」

「神社で?」

「とにかく、来てください!」

そして大神は状況を把握できないまま神社に駆けつけると、神社の離れの方で人が大勢集まっていた。

「一体どうしたんですか?」

大神が聞く。

「いや、この中においてあった鎧がないんだよ!」

「なんですって?」

そう聞いた大神は離れの建物の中に入った。

「…これは…」

そう、確かにそこに置いてあったはずの鎧一式が無くなっていたのだった。

大神は何気なく外を見ると、

「…鍵が壊されている」

そう、普段は扉に掛かかっているであろう南京錠が壊されていたのだ。

おそらく何者かが鍵を壊して中に入った一式を盗んだのであろう。

「…いつ、無くなったのに気が付いたんですか？」

大神が聞く。と、一人の村人が、

「…うん、昨日の夕方に宮司さんが確認した時にはまだあったらしいんだ。それが今朝見てみたら無かつたらしいんだ」

「となると、昨日の夜から今朝にかけて…」

「そういうことになるな」

「…一体どうしたの？」

大神の背後で聞き覚えのある声が出た。

「あ、あやめさん」

そう、あやめが紅蘭とアイリスを連れて神社に来ていたのだ。

「大神君のお父様に聞いたらここにきている、って言ってたから…。一体どうしたの？」

「いや、実は…」

と大神は何者かによって鎧一式が盗まれた事を話した。

「…本当？」

と、

「…これは…」

中を見た紅蘭が呟いた。

「どうしたんだ、紅蘭？」

「…この鎧、昨日見た鎧武者が着ていたのと同じ鎧や！」

「なんだって？」

「…確かそうやったな、アイリス。この鎧やったな」

「う、うん。昨日見た人、この鎧を着てたよ！」

「…あんたたちも見たのかい？」

一人の村人が二人に話しかけた。

「…あんたたちも見た、って…」

「実は昨夜、鎧武者を見た、って何人かの村人が言っていたんだよ」
「本当ですか？」

「ああ。それがこの神社においてある鎧と同じような鎧だったからって、みんな確かめに行こう、ってことになって今朝神社に来て見たら宮司さんがきて、鎧がひとつ無くなっていた、って言うんだ」

「そうだったんですか…。となると、犯人は夜のうちにこの神社から鎧を盗み出した、と言うことになりますね。そしてそれを来て昨日の夜の間、村中のあちこちに顔を出した。でも、なんで犯人はそんな事したんでしょうか？」

その後、暫くして地元の警察がやってきて現場検証をすることになり、その場にいた村人達は解散、と言うことになり、大神たちも家に帰ることになった。

*

そして午前10時を少し回った頃だった。

「御免ください！」

玄関の方で声がした。

「…はい！」

その声に大神が応え、玄関に出る。

そこには警官の制服を着た男が立っていた。

「あ、これは大神さんの…確か少尉、でしたね。いつ頃お帰りになられたんですか？」

「昨日帰ってきたばかりですが…、ところで鎧の盗難事件のほうはどうなりました？」

「…難しいですなあ。どうやら犯行時刻は昨日の8時から9時頃と
いうのがわかったんですが、丁度その頃の目撃証言がまったくと
言っていないほどないもんですよ」

「…どういうことですか？」

「ほら、昨日、今度の祭りの集会在神社であったでしょう？ それ
が終わって集まっていた村人達がみんな自分の家に帰った直後だっ
たので誰も神社の方に言っていないんですわ」

「…となると、犯人はその時刻を狙った、と言うことになりますね
…」

「確かにそうとも考えられますが…。ところで大神少尉」

「どうかしましたか？」

「少尉殿の御友人に田村弘和、と言う人物はおられますか？」

「…田村がどうかしましたか？」

「実はですなあ、昨夜から行方がわからなくなっているんですわ」

「何ですって？」

「ええ。昨日、神社で行なわれた集会に顔を出したところまでは確
認されたのですが、そこからの足取りがつかめていないんですわ」

「本当ですか？」

「はい。ご両親から息子を捜して欲しい、と言う連絡が入りまして。
村の人たちにも協力をお願いしているんですわ」

「…わかりました。自分も協力します」

*

「…一体どうしたの、大神くん？」

大神のただならぬ様子に気が付いたか、あやめが話しかける。

「あ、あやめさん。実はですね…」

と大神は警官とのやり取りを話した。

「本当？」

「ええ。あんなことがあつたばかりだというのに今度は新しい事件
が起きたんで心配で…」

「…わかったわ。私も協力するわ」

「ありがとうございます」

「それからアイリスと紅蘭にも手伝ってもらいましょう。二人には私のほうから話しておくわ」

*

そしてあやめから話を聞いたアイリスたち二人を加えて大神たちは手分けして行方不明になっている、と言う田村を捜し始めた。

その途中でのこと。

(…そうだ!)

大神は友人でもある横川の家に寄ることにした。田村が行方不明になっている事を話し、探すのを手伝ってもらおうと思ったのだ。た。

「ゴメンください」

大神が玄関で呼びかける。

「あ、これは大神さん所の…」

「すみません、横川いますか？」

「え？ 大神さんのところに行つてたんじゃないのか？」

「？ どうしたんですか？」

「いや、今朝西田さん所の息子と『何処かへ出かける』と言ったきりまだ戻ってきていないんだよ。てつきり大神さんのところに行っているのかと思つて」

「何ですつて？ それじゃあ西田も…」

「…ああ、話は聞いたよ。田村さん所の息子が行方がわからなくなつたと聞いて、捜すのを手伝ってもらおうかと思つていたのに、帰つてこないんだから…」

「だとすると…」

「？ どうしたんだい？」

「いえ、どうも済みませんでした！」

そして大神は家を出た。

その後大神はあちこちを捜したのだが、田村も、西田も横川も見つからず、ひとまず家に帰ることにした。あやめや紅蘭たちからも情報を聞こうと思ったのだ。

*

家に戻ると既にあやめたち三人は戻ってきていた。

「あやめさん、そちらはどうでした？」

「特にこれと言った情報はなかったわ」

「紅蘭は？」

「こつちも時に有力な手がかりはなかったけど…」

「それよりどうしたの大神くん？」

「いや、実はですね…」

と大神は、横川と西田も行方がわからなくなっていることを話した。

「…なんですつて？」

「勿論、田村たちが行方不明になっていることと今回の事件が関係あるかどうかはわかりません。でも、ああいった事件があった後だけにこういうことがあるとなんか気になって」

「確かにそうよね。今回の事件と関係があるかどうかも気になるし、それじゃあ、こうしましょう。私たちは私たちのほうでその村の人たちと一緒に、その田村と言う人を探すのを続けるから、大神くんは他の二人を捜す方をやって」

やはりこういう時はあやめが一番頼りになる。

「わかりました。村の人たちにも協力してもらいます」

「お願いするわ」

*

しかし、それから村人達が手分けして捜したのにもかかわらず、三人は見つからず、時間だけが過ぎていった。

そして、夕暮れが近づいてきた頃だった。

「…これだけ捜しても見つからないなんて…」

紅蘭とアイリスが並んで道を歩いていた。

「…どうする、紅蘭？」

アイリスが聞く。

「うーん…、この村はそんなに広くないからすぐ見つかる思ったんやけどな」

「でもこの辺り、山とか一杯あるよ」

「確かに山の中に隠れてしまえば探すのも一苦労やしな…。大神はんに頼んで山の中を捜すしかないんやろか。でももう暗くなつとるから捜すにしろ、明日の朝になってまうし…」

「とりあえずお兄ちゃんの家に戻ろう」

「せやな。それで今後どうすればええか相談した方がええかもしれんな」

そして二人が神社の前に来た時だった。

「…ここは…」

紅蘭が神社に続く階段を見上げる。

「…紅蘭、どうしたの？」

「大神はんが言うつとったお祭りをやるいう神社は確かここやったな」

「…うん。確かお兄ちゃん、そう言っていたよ」

「…行ってみよか？」

「え？」

「そういえばまだ、ここ見ておらんし、もしかしたら何かわかるかもしれんで、行ってみよ！ 大神はんの家に戻るのほそれからでもええやろ？」

「…うん！」

アイリスも頷いた。

「ほな、行ってみよか」

そして紅蘭は階段を昇っていった。

アイリスもそれについていく。

「アイリス、気をつけるんやで」
「うん」

二人は神社の階段を昇っていった。
階段は思った以上に急な高さで昇るのにも一苦勞である。
そして上まで昇りきったときだった。

「…紅蘭、あれ！」
アイリスが指を指す。

そう、本殿の近くに建っている建物の近くの扉が開いていたのだ
った。

「…行ってみよか」
その言葉に頷くアイリス。

二人はゆっくりと歩いていく。
そして紅蘭が扉の中に入ってしまった。

そして部屋の中を覗いた瞬間、
「うっ…」

紅蘭が口を塞いだ。
「どうしたの紅蘭？」

そう言いながらアイリスも部屋の中を覗く。
「…！」

アイリスも自分の目の前の様子を見て言葉を失ってしまった。
そこには首がない死体が転がっていたのだ。

「あ…あわ…、あわわわ…」
恐ろしさのあまり、声が出ない。

「ア…アイリス、み…みんなに、みんなに報せに行くで！」
やっとの事で正気に戻った紅蘭は、隣で茫然と立ちすくんでいる
アイリスに話し掛ける。

「う、うん…」
二人は死体に背を向け、外へ出ようとした。
その時だった。

紅蘭は後から抱きかかえられると、何やら湿ったものを口に押し

つけられた。

あつという間に紅蘭の意識が遠退いていった。

「！ 紅蘭、どうし…」

アイリスが話し掛けた時、アイリスにも口に湿ったものが押しつけられた。

(第3話に続く)

第3話

「大神くん、大変よ！」

あやめが大神のもとに駆け寄った。

「あやめさん、どうしたんですか？」

「それが…、アイリスと紅蘭がどこを探してもいないのよ！」

「何ですって？」

「…約束の時間になっても二人とも戻ってこなくて…。それから30分くらい待ったんだけど、それでも戻ってこないのよ！ アイリスはとにかく、紅蘭は約束の時間に遅れる、なんてことはまずないのに…」

「…あんなことがあったばかりだというのに…。一体どこへ行っただんだ！」

「村の人たちに話したら、何人かが一緒に探してくれる、って言うてたわ。とにかく、私たちも探しましょう」

「はい！」

そして大神とあやめは揃って二人を探しはじめた。

*

「すみません。眼鏡をかけたお下げ髪の女の子が、頭にリボンをした金髪の女の子を見かけませんでしたか？」

「さつきもそう尋ねてきた人がいたけど、見かけなかったなあ」

「そうですか…。ありがとうございます！」

大神はそう言うと、向かい側の家で二人の行方を尋ねていたあやめと落ち合った。

「…どう？ 大神くん」

「いえ、こつちには来てないそうです。あやめさんのほうは？」

「こつちも手がかりなし。きっと二人はこつちのほうには来ていないのよ。アイリスも紅蘭も特徴があるからすぐに気が付くと思うんだけど…」

「自分もそう思います。あとは…」
「あとは？」

「…神社の方だけです。でも今からじゃあそこも暗くなってるんじゃない…」

そう、いつの間にかあたりは暗くなっていて、よほど近づかないとお互いの顔もわからないくらいだったのだ。

「…とにかく行ってみる必要はありそうね」

「わかりました！ じゃ一旦家に戻ってカンテラを取ってきます！」

一度家に戻った大神はカンテラを持つと再び外に飛び出した。

「じゃ親父。もし二人が戻ってきたら頼むよ！」

「わかった。一郎も気をつけるよ」

「わかったよ！」

そして大神は外で待っていたあやめの元に駆け寄る。

「じゃ、大神くん、行きましょう」

「はい！」

*

そして二人は神社の元へとやってきた。

「あやめさん、行きましょう！」

と、大神が言った時だった。

「…大神くん、ちょっと待って！」

「…どうしたんですか？」

「あれを見て！」

そしてあやめの指差した方向に大神がカンテラの明かりを向けた。階段の隅に何かどす黒い液体のようなものがこびりついていたのだ。

「これは…」

大神はそれに近づくと指を付けてみた。

「…血だ！」

「何ですって？」

大神は自分の指先にカンテラの明かりを近づける。確かに大神の言うとおり、それは血のようであった。

「だとしたら…」

「行ってみましょう！」

「はい！」

そして大神とあやめの二人は階段を昇っていった。

「あやめさん、足元に気を付けてください！」

大神とあやめはカンテラの灯りを頼りに石段を昇っていく。

そして神社の前に着く二人。

「大神くん、あれっ！」

あやめがカンテラの灯りをその方向に向ける。

本田の隣にある建物の前に一匹のぬいぐるみが転がっていた。

「あれは…？」

大神がそれに近付き拾いあげる。そのぬいぐるみには大神もあやめも見覚えがあった。

「アイリスのジャンポールだ…」

「ということば…」

一瞬二人の脳裏にアイリスと紅蘭が物言わぬ死体となって転がっている光景がよぎった。

「…いや、そんなことは絶対ない！」

大神は大袈裟に首を振ってその考えを打ち消そうとした。

「…とにかく、中に入ってみましょう」

あやめのその言葉に大神が頷く。

そして二人はその建物の扉の前に立った。

「…行きますよ」

大神の声に頷くあやめ。

そして大神は一回深呼吸をすると、勢いよく扉を開けた。

そして大神の持つカンテラに映し出されていたのは…

「アイリス！ 紅蘭！」

そう、アイリスと紅蘭が後手に縛られ、床に転がされていたのだ。大神とあやめは二人の側に行くと言を解く。

「アイリス、アイリス！」

「紅蘭、しっかりして！」

二人が肩を揺らす。と、

「…う、ううん…。あ…、あやめはん…」

紅蘭が気が付いたようだ。程なくアイリスも、

「あ…お兄ちゃん…」

「二人とも怪我はない？」

「だ、大丈夫や」

「いったいどうしたんだ？」

「どうした、って…。後からいきなり抱きかかえられて、それで口に何や湿ったもんを押しつけられて…」

「…アイリスもか？」

大神がそう聞くとアイリスも頷いた。

「何か眠り薬のようなものを嗅がされたのね…」

そしてあやめの手助けで紅蘭たちが起き上がったときだった。

「…これは！」

大神が何かに気づいたようだった。

「どうしたの、大神くん？」

「…血だ…」

そう、大神がカンテラで照らした先には血だまりが出来ていたのだった。

「これは…」

「あ、そのことやけどな…、うっ！」

そういうと紅蘭は再び頭を押さえてしまった。

「どうしたの？」

「まだ頭がボーツとしとるわ…」

「…とにかく、後は大神くんの家に戻ってからにしましょう」

*

大神の家。あやめが部屋から出てきた。

あやめが静かに障子を閉めるのを待つて大神は、

「…どうですか？ あやめさん」

大神が小声で聞いた。

「大丈夫よ。今は二人ともぐつすり眠ってるわ」

「そうですね…。すみません、あやめさん。自分の監督不行届です」

「ううん、大神くんは悪くないわ。責任は私にだってあるわよ」

「…それにしても、何で犯人はあんな事をしたんでしょうか？」

「あんなこと、って？」

「あやめさんも見ましたよね？ あそこの床に血があつたのを」

「確かにそれはみたわ。でも、アイリスも紅蘭もどこも怪我をして
いる様子はなかったし…」

「となると、あれはおそらく他の誰かの血、と言うことになるん
ですが…。でもあそこにはアイリスと紅蘭の二人しかいなかったし、

二人があれだけで済んだ、と言うのがわからないですよ」

「あれだけで済んだ、って？」

「つまり、あの現場でアイリスと紅蘭の二人は何かを見かけた、と
言うことになるんですよ。だとしたら二人は殺されてもおかしくな
かったのに、何で睡眠薬をかがされ、縛られていた程度で済んだの
かがわからないんですよ」

「確かにね。あの状況だったら、二人は殺されてもおかしくはな
かつたはずよね」

と、そのときだった。不意に障子が開くと、

「あ、あのな、大神はん。ちよつとええか？」

紅蘭が顔を出した。

「紅蘭、寝てなきや駄目じゃない」

「あ、もう大丈夫や、あやめはん」

そう言う紅蘭の顔色はまだすぐれている、とは言えなかった。

「…それより、どうしたんだい？」

「いや、二人に話したいことがあるんや」

「話したいこと？」

「…なんだって？」

「それは本当なの？」

紅蘭から話を聞いた大神とあやめは驚きの声を上げる。

「本当や。それでその後でウチ、誰かに眠り薬をかがされたんや」

「でも、あそこに死体なんてなかったわよ」

「でもこの目でちゃんと見たんや。それはアイリスもちゃんと見とるから間違いないで」

「…でも、そうと考えないと、あそこの血だまりの説明が出来ませんよね」

「確かにあそこに落ちていた血は、紅蘭の言う首無し死体のものと考えれば納得いくけど、だとしてもまだわからない部分が多いわね」

「そうですね。確かに紅蘭たちがその首無し死体を見た、と言う時刻から我々が紅蘭を見つけるまでかなり開いているから死体を動かすことは可能かもしれませんが、だとしても、何で犯人はそんな事をしたんでしょうか？」

「二人に見られては何かまずいことでもあったんじゃないかしら？」

「でも、そうだとしても、自分が犯人だったら口封じのためにアイリスと紅蘭を殺してますよ。そんな事をしないでなんで二人があんな風に眠り薬をかがされていただけで済んだのか、わからないんですよ」

「…確かにね。考えれば考えるほどわからなくなってくることはかりだわ」

「…ところで紅蘭、その、紅蘭たちが見た死体、って何か特徴あったか？」

「特徴言うてもなあ…。さっきも言ったとおり、首がなかったし、辺りは暗くなりかけてたし、服装くらいしかわからん買ったわ。そ

の服装かてこれと言った特徴はあらへんかったし…」

と、そのときだった。

「大神さん、ちよつといいですか！」

不意に大神の家の玄関から声がした。

「どうしたんですか？」

そついいながら大神が玄関に行くと、

「大変なことが起こつたんですよ！」

「大変なこと？」

「それが…、田村さんの死体が見つかったんですよ！」

「田村の、ですか？」

「とにかく来てください！」

「わかりました」

「大神はん、ウチも行くわ！」

話を聞いていた、紅蘭が大神のところに来た。

「紅蘭、君はここにいろ」

「それはそうやけど、死体を確かめたいんや。ウチやアイリスが見たのと同じかどうか」

「でも…」

と、話を聞いていたあやめが、

「大神くん。アイリスの方は私が面倒を見るから、紅蘭も連れて行つたら？」

その言葉に大神はちよつと考えると、

「…わかりました。紅蘭、ついて来い！」

「わかつたわ！」

そして二人は家を飛び出していった。

やがて二人が案内されてやってきたのはとある草むらだった。既に大勢の野次馬が集まっている。

「あ、大神少尉！」

見ると昼に大神の家に行って来た警官が大神を呼んだ。

「田村の死体が見つかった、と言う話なんですが」

「あ、こちらです!」

そしてその警官は大神を手招きで莫蔭が敷いてあるところまで招いた。

「先ほど村人から連絡があつたんですが」

と、その警官は足の方からその莫蔭をめぐつた。

さすがに切断された部分を見せるのはまずいと思つたのか、胸から上の部分は莫蔭で覆つたままだったが、それでも衣服についている血でどれだけのものだったか想像ができると言つものである。

「…この人は…」

死体の服を見た紅蘭が呟いた。

「どうした、紅蘭?」

「…この人や。ウチらが神社で見た死体、間違いなくこの人や」

「本当なのか?」

「間違いがないで! 服が同じやつたからな」

「…となると、この死体は田村、つてことになるのか」

「そういうことになりませぬ」

そういうとその警官は莫蔭を元に戻した。

「…ところでひとつ聞いていいですか?」

「なんででしょうか?」

「…田村の首は見つかったんですか?」

「いや、それが今捜しているところなんです、まだ見つからないんですよ」

「見つかっていない?」

「はい。もしかしたら何処かに埋めたのかもしれませんが…」

「…西田と横川も行方不明だし、一体どうなっているんだ…」

大神にはどうも今回の事件が今だによく理解できていなかった。

落武者伝説殺人事件

(第4話に続く)

第4話

やがて首なし死体が運ばれて行くと、そこに集まった村人は三々五々散っていった。

しかし、大神と紅蘭はそのまま現場に残っていた。

「…どうかなさいましたか？」

そんな二人に気がついたか、警官が話しかけてきた。

「いえ…、実は、紅蘭が神社でこの死体を見つけたんですよ」

「ああ、その話なら聞きましたよ。なんでももう一人の女の子と縛られて監禁されていたそうですね。まあ、怪我がなくて何よりでしたけど、大丈夫ですか？」

「え？ ええ。ウチはもう大丈夫です」

「…その、死体を発見した状況について詳しく教えていただけませんか？」

「…そうですね、あの神社で…。いや、私も次々と行方不明の事件が起こっていたから村人たちに協力を仰ぐのが精一杯で。どうも失礼しました」

「いえ、別にそれは構いませんが」

「それにしても妙ですね。紅蘭さんの証言によると、死体を発見して知らせに行こうとしたときに、何者かがお二人に後ろから襲い掛かって、眠り薬をかがせた、ということですよ。そして二人を縛って逃げた…」

「ええ。自分はどうして紅蘭とアイリスがその程度で済んだのかわからないんですよ。だって二人は殺されたっておかしくないですよ？」

「それもありますけれど、紅蘭さんの証言の通りだと、二人に眠り薬をかがせた、と言うことですよね。いや、人間の心理としては犯行を犯したらさっさと逃げるのが普通なのに、何でその場に残った

「ままだつたんでしょっか？」

それを聞いた瞬間、大神は自分が今まで気がつかなかったことに気がついた。

「…そうか、確かにそうですね！ 犯人としては何者かに目撃されるのが一番怖いはずなのに…。なんだか紅蘭とアイリスが来ることを待っていた感じですよね」

「それに犯人は何でわざわざ死体を移したんでしょっか？」

「移した？」

「ええ。紅蘭さんの証言によると、お二人が死体を発見した後何者かが二人に眠り薬をかがせ、縛った後に死体をこの現場に持ってきたことになりまますよね。だとしたら何でそんな回りくどいことをしたんでしょっか？」

「確かにそうですね。そう考えると犯人はなんだか死体を見せようとしていたみたいですね」

「…まあ、いずれにせよ、これから死体を調べてみないことにはなんとはいえませんか」

「…結果はいつごろでますか？」

「うーん。ここでは満足な施設もありませんからねえ。隣町の病院に持っていかなければ行けませんから、早くても明日の昼ごろになりますかね」

「…もし結果がわかったら、自分達にも教えてくれませんか？」

「…ええ、それはかまいませんが」

「それじゃ、お願いします。…もう疲れただろう？ 紅蘭、帰ろうか」

「はいはい」

*

そして大神が家に戻ったのはすでに夜の10時を回っていた頃だった。

「お帰りなさい」

あやめが大神と紅蘭を出迎えた。

「…アイリスは？」

「大丈夫よ、ぐっすり眠っているわ」

「…ほな、ウチももう寝るわ」

「ああ、ゆっくり休め」

「ほな、お休みなさい」

そして紅蘭がアイリスが眠っている部屋に入るのを見た大神は、

「あやめさん、ちよつと…」

「…何かわかつたの？」

そして大神はあやめを茶の間に呼び出した。

「…うーん。考えてみれば確かにそのお巡りさんの言う通りよね」

茶の間で大神の話聞いたあやめはそう言う。

「…あやめさんもそう思いますか？」

「…そうね。私も神社であの血を見たとき、一瞬二人の身に何かあったのかと思ったもの。もし二人が殺されていたとしたら犯人の行った行動の理由もわかるんだけど、なぜ二人を縛って逃げただけだったのかしら…？」

「しかも死体を移動もさせてますからね」

「うーん…、考えれば考えるほどわからなくなるわね」

*

そしてその翌日の昼前のことだった。

「ごめんください」

玄関のほうで声がしたので、大神が出てみると、

「あ、大神少尉」

「あ、あなたでしたか」

そう、昨夜いろいろと大神や紅蘭から事情を聞いた警官が立っていたのだった。

「いや、実はですな、先ほど例の死体についての報告が来たんでお知らせしようかと思ひまして」

「あ、それはわざわざすみません」

それを聞いたか、大神の傍らにあやめたちもやって来た。

「…それで、どういう結果が出たんですか？」

「ええ、それがどうも妙なんですよ」

「妙、といますと？」

「はあ。死体が首を切り落とされたとき、既に被害者は死んでいたのではないかと、言うんですよ」

「死んでいた、ってどういうことですか？」

「ええ。実は死体をよく調べたところ切断面のすぐ下になにやら紐状のようなものが巻きつけられた跡があったらしいんですよ」

「そう言いながら警官は自分の首の周りを指でなぞる。どうやら、こういった形で残っていた」と言いたいようだ。

「それじゃあ…」

「ええ。被害者の死因の一つに首を絞められたことによる窒息死、と言う可能性も出てきたわけですよ」

「だとしたら、何で首を絞めた後にわざわざ首なんか切ったんですか？ しかもわざわざそれを神社の中に残している…」

「ええ。どうもそれがよくわからないらしいんですよ」

「となると犯人は一体何の目的があつて…」

「さあ、そこまではちよつと…」

と、大神は何かを思い出したかのように、

「そういえば、一つお聞きしたいんですけれど」

「なんですか？」

「…西田と横川の行方はまだわからないんですか？」

「ええ、八方手を尽くして探してはいるんですが…。一応近隣の警察にも協力を依頼していますし、場合によっては山狩りも考えているんですが」

「そうですか…。いや、わざわざ有難うございました」

「いえ、こちらこそ」

そして警官が大神の家を出て行くのと入れ違つような形で、
「大神さん、ちよつといいですか？」

一人の村人が家に入ってきた。

「…なんででしょうか？」

「いや、西田さんのところと横川さんのところの息子さんがまだ見つかっていませんけれど…」

「ああ、そのことなら今、警察の人に聞きました」

「そのことで今から集会所で、これからについて話し合おう、と言うことになりました」

「…わかりました。今から伺います」

「助かります」

と、傍らにいたあやめが、

「…あの、私も一緒に行つていいでしょうか？」

「ええ、それは別にかまいませんが」

「どうしたんですか、あやめさん」

「いえ、私ももつと詳しい話が聞きたいから…」

「…わかりました。紅蘭、アイリスのことを頼むぞ」

「わかってます」

*

そして大神とあやめの二人が集会所についた頃には既に何人かの村人が集まっていた。

大神は集会所に入ると、いきなり村人たちに向かって、

「…どうも皆さん、昨夜は御迷惑をおかけ致しました」

と、紅蘭とアイリスの件についてであろう、村人たちに頭を下げる。と、

「いやいや、それは構いませんよ」

「何よりも二人が無事でよかったですよね」

「あれから二人は大丈夫なんですか？」

村人たちが次々と声をかける。

「ええ、もう大丈夫ですよ。本当に皆さんにはご心配おかけしました」

あやめも村人たちに頭を下げる。と、

「…そういえばさつき警官が大神さんの家に来ていたけど、何話していたんだ？」

一人の村人が大神に聞いた。

「ああ、それですか。いや、ちょっと気になることがあって…」

「気になること？」

「いや、実は…」

と、大神は手短かに死体が首を絞められた跡に切断された可能性がある、と言うことを話した。

「…まあ、そう言われてみればそうだな。何でわざわざ犯人はそんなことをしたのかねえ…」

と、別の村人が、

「…それにしても田村さんのところも娘さんがあんなことになったと思ったら、今度は息子さんまで…。本当に気の毒だな」

「…あんなこと、つて。確か田村の妹、つて自殺したんですよ」

その話を聞いた大神がその村人に話しかける。

「ああ、確かにそうだが。実はあの子が自殺した後いろいろな噂が飛び交ってね」

「噂が…、ですか？」

「ああ。明るくて元気なあの子が自殺する、なんて考えられんことだったからな。実はあの子が暴行を受けてそれで…、と言われているんだ」

「暴行を、ですか？」

「うん。いや、その現場を見たものはいないし、あくまでも噂に過ぎないんだが…、ただ。あの神社に近い草むらでなにやら争った形跡があった、と言う話も聞くし…」

「草むらで…」

そう聞いた大神は思わず黙り込んでしまった

「…どうしたの、大神くん？」

隣に座っていたあやめが大神に聞いた。

「あ、いえ。…だとしたら、もし、田村の妹がそれが原因で自殺し

たとしても、なぜ田村が殺されなければならぬのでしょうか？」

「…誰かが田村さんに恨みを持っていたとか…」

「ちよつと待つてくださいよ。確かに自分は東京のほうに行つてますから、こちらの最近の事情はよくわかりませんけれど、最近、何か田村やその親御さんが何か恨み買われるようなことをしてたんですか？ 田村の家族がそんな事をされるような家でないことくらいは自分より皆さんのほうがよくご存知でしょう？」

「うーん、確かにそういわれてみればそうなんだが…」

「それに、今回の事件での横川と西田の行方不明との関連もわからないし、これはあくまでも仮定の話ですけれど、もし横川か西田のどちらかが田村を殺した犯人だとしても、その動機は何なんでしょうか？ いや、もしかしたら彼らと田村の間に何かあって、もしそれが犯行の動機だとしても、アイリスと紅蘭が死体まで目撃しているのに殺されもせず、監禁されただけだった、と言うのも説明がつかないし…」

「確かにあの二人の行方もわかってないしね。それに今の時点ではあの二人のどちらかが犯人と言う証拠も何も無いわ」

あやめが言う。

「…とにかく、今回の事件はまだわからないことだらけです。とにかく一つ道を間違えたらいつまで経つても解決しないのではないのでしょうか？」

と、そのときだった。

不意に集会所のドアが開き、一人の村人が顔を出した。

なにやら非常にあわてている様子だった。

「…どうしたんだ、一体？」

「大変だ！ また死体が見つかったんだよ！」

「何だつて？」

「どこで見つかったんだ？」

「その山の中だよ。とにかく来てくれ！」

その声を聞いた集会所の村人は我先にと集会所を出て行った。

「…あやめさん」

「わかったわ！」

そして大神とあやめも村人たちについていった。

*

大神たちがそこに着くと、既に何人もの野次馬が来ていた。

その中に自分の父親の姿を見つけた大神は、

「親父！」

そう叫ぶと、一人の男が振り向いた。

「…一郎か？」

そう言う父親の傍らで、

「お兄ちゃん！」

「あやめはん！」

大神の父親についてきたのであろう、紅蘭とアイリスもそこにいた。

「…一体どうしたんだ？」

大神が父親に聞くと、

「いや、ついさっきここで死体が発見された、って聞いてな。ともかくにも駆けつけたんだ。この子達も行きたい、って言うから連れてきたんだが…」

そして大神は野次馬を掻き分けると中に入ってしまった。

「…うっ…」

その場に転がっている死体を見て思わず大神が絶句する。

そこには昨夜見たのと同じように、首のない死体が転がっていたのだった。

こみ上げてくる気持ち悪さを抑えつつ、大神はゆっくりと死体に近づく。

「…西田！」

大神が叫んだ。

「西田、…って西田さん所の息子か？」

「…そうですね。行方がわからなくなる前に西田がこの服を着ていましたから」

「となるとこの死体は西田さん所の…」

「しかし、何でまた首を…」

その時だった。

「お、落武者だ！ 落武者の呪いだ！」

一人の村人が叫んだ。

「馬鹿な！ 呪いなんてそんなもの、現代にあるわけないやろ！ 思わず紅蘭が叫んでいた。

「いや、もしかしたら…」

「もしかしたら、って大神はん…」

「いや、オレだって呪いとかそんなものは信じてないよ。でも、一概に否定できないのも事実なんだ」

「…どうということや？」

「この死体も調べてもらわなければならぬし…、詳しいことは家で話すよ」

(第5話に続く)

第5話

大神の家。

大神、あやめ、紅蘭、アイリスの4人が座敷の中で輪になって座っていた。

「…で、大神はん。その、さっき言ってた『呪いと言われても否定できない』ってどういふことなんや？」

紅蘭が大神に聞いた。

「ああ、それか。…前に明智光秀の軍勢の生き残りがこの村に落ち延びてきた、と言う話はしたる？」

「あ、ああ。覚えとるわ。確か食うに困って、村人たちが意を決して、落武者を皆殺しにして首を晒しものにしたいうあれやろ？」

「ああ。…実はこの村にはそのときの村人の子孫だ、って人が大勢いるんだ」

「それ、本当なの？」

アイリスが聞く。

「ああ、この村は先祖の代からずっとこの村に住んでいる、と言う人が多いんだ」

「…じゃあ、大神はんの先祖もその一人か？」

「いや、オレの先祖はもともと別の土地の人間で、江戸時代になつてからこの村に移り住んだらしいから、関係はないんだけどな」

「…それで、その落武者を皆殺しにした話と村人が言っていた呪い、つてのは何の関係があるんや？」

「今言つたとおり、オレの先祖は江戸時代になつてこの村に移り住んできたから、詳しいことはよくわからないんだが、その、落武者を皆殺しにした村人たちの中で中心人物となつたのが、西田と横川と田村の先祖だった、って言われているんだ」

「…それは本当のことなの？」

あやめが大神に聞いた。

「いや、あくまでも昔のことだから確証はないんだが、西田たちの家では先祖代々そのように伝えられてきている、って言うんだ」

「…そうやったんか。確かにそうならば、村人の言うこともわかるな。でも大神はん、そんな呪いなんて…」

「わかってるよ。オレだって呪いなんて信じてないさ。でも、こんな事件が続けば村人たちが呪いにしたくなる気持ちだってわかる気がするさ」

「…でも、この事件は焼く解決しないとますます村人たちが不安になるで。それに、まだ残った横川という人の行方もわからんのやる？」

「ああ、確かに今、村人たちが探しているがな。それにしても…」

「それにしても、どうしたの？」

あやめが大神に聞く。

「うーん…、なんか気になるんですよねえ」

「気になる、って？」

「普通に考えれば今回の事件、横川が田村と西田を殺した、と言うことになるんでしょうけど、だとしたら何で横川が二人を殺さなければいけないのかわからないんですよ」

「そりゃあ、大神はんにはわからない何か理由があつたんやないか？ 大神はんだってずっとここにおけるわけやないんやから」

「確かにそうかもしれないんだが…、横川が犯人だとしたらいろいろとわからない部分が出てくるんだ。それに…」

「それに？」

「…なんで紅蘭とアイリスが縛られて転がされただけで済んだのかわからないんですよね」

「わからない、って？」

「…もしオレが犯人だとしたら、紅蘭とアイリスを口封じのために殺していますよ。それなのに犯人はそんなことをしなかった。まるで二人に生きたまま欲しかったようじゃないですか。何か殺してはいけない理由があつたと思えませんか」

「…じゃあ、大神はんはその、行方不明になつとる横川いう人が犯人やない、思うとるんか？」

「いや、そうは思っていないけれど、確かに横川が犯人の可能性だつて捨てきれないけれど、今回の事件はわからないことが多すぎるんだ。それに、あの鎧武者だつて何者かがわからないしね」

「鎧武者、つて…？」

「ほら、ここに来た日に紅蘭たちが見たあの鎧武者さ」

「ああ、あれか…」

「ああ。あの時、オレは紅蘭から『誰かが風呂場を覗いているみたいだ』と言われて、ちょうどあやめさんが入ることもあつて外で見張りをしていたときにアイリスと紅蘭が鎧武者を見た、と言つただろ？」

「ああ。それがどうしたんや？」

「…あの時、その場にいたのは西田と横川だつたんだ。何であの時にあんなのが出てきたのかわからないし、もし犯人が横川だつたとすると、あのときの鎧武者は誰だ、と言つことになるんじゃないのか？」

「…うーん。確かに今回の事件とあの鎧武者の関連もわからんわな。それになんであんな格好で現れたのかもわからんし…」

「とにかく今回の事件はわからないことだらけだよ。ただ…」

「ただ、なんや？」

「ただ、あくまでもオレの勘だけれど、これらの事件の謎の一つでもわかれば後の謎もわかるような気がするんだよな」

「…それにその、行方不明になっている人の行方もまだわからないしね」

「…早く見つかるといいんだけど…」

と、そのときだった。

「ごめんください」

不意に玄關のほうで声がした。

大神が玄関に向かうと、そこには大神の村の警官が立っていたのだ。

「いやあ、こんな遅くに申し訳ありませんなあ」

「いや、それは構いませんが…。一体どうしたんですか？」

「いや、ちよつと気になることがあって、一応大神少尉にもお話ししておこうか、と思ひまして」

「気になること？」

「ええ。実はあの後、交番に戻ってまもなく、署のほうから連絡がありましたなあ」

「署のほうから…、って警察署ですか？」

「ええ。いや、実はあの後、詳しく死体を調べたい、と言ってきたらしくて、署のほうで街の病院に依頼して、最初に見つかった首無し死体を詳しく調べてもらったそうなんです、その結果がわかったらしいんですよ」

「…田村の死体がどうかしましたか？」

「それが、ちよつと妙なことがわかりまして」

「妙なこと？」

「いや、難しいことは省くとして、とりあえず、死因は警部圧迫による窒息死らしい、と言うことは間違いないようですね」

「窒息死、ということは殺してから首を切断した、と言うことですか？」

「…そういうことになりませぬ」

「じゃあ、何でわざわざそんなことをしたんでしょうか？」

「いや、署のほうでは何か理由があつてそんなことをしたんじゃないか、と言う意見があつたようで詳しく調べてみる、と言ってましたよ。それと…」

「それと？」

「これは署のほうでも不思議がつているんですがね、首なし死体の死体と衣服がどうも合っていないんですよね」

「合っていない、ってどういうことなんですか？」

「いえ、なんて言うんですか、死体より若干着衣のほうかぶかぶかしている、と言うか、なんか大きいんですよ」

「大きい、って…?」

「…言ったとおりですよ。死体が着ていた服がちょっと大きめだった、と言うことなんですよ」

「…妙ですね。いくらなんでも普段からそんな大き目の服を着ている、なんて考えられませんよ」

「ええ。ですから署のほうでも、どうも今回の事件についてはわからないことが多い、と戸惑っているようなんですよ」

「うーん、そうなるのもっと調べてみる必要があるのではないのでしょうか?」

「…ええ。ですので、先ほど見つかったもう一つの首なし死体のほうも署のほうに頼んで、病院のほうで詳しく調べてもらおうか、と思っているんですが…」

「そうですね…。ところで、横川の行方はまだわからないんですか?」

「ええ、まだわかりませんな。実は死体の結果の報告があったとき、ついでに、と言っては何ですが、署のほうに応援を頼んでおいたんですよ。で、明日には何人か応援が来てくれる、と言う話なんです」

「そうですね、すみません」

「いえいえ、こちらもし仕事ですから。それじゃまた、何かありましたら」

「そういつとその警察官は玄関を出て行った。」

「警官が去った後も大神は玄関に立ったままじっと考え込んでいた。」

「と、」

「…どうしたんや、大神はん?」

「紅蘭が大神に話しかけてきた。」

「あ、いや。どうも妙なことがわかってね」
「妙なこと？」

そして大神は今の警官とのやり取りを手短に紅蘭に話した。
と、

「…うーん。なんかウチもすつきりしないところがあるなあ」
「すつきりしない？」

「さっきのお巡りはんの話やと、死体と衣服の大きさがおかしい、
言う話やったやろ？」

「それがどうかしたのかい？」
大神が紅蘭に聞いた。

「風船やあるまいし、いくら死んでいるから、と言ってそんな一晩
やそこらで縮む、なんてことがないくらい大神はんだって知つとる
やろ？」

「確かにそうだな。死後硬直くらいはあるかもしれないけれど、そ
んな縮む、なんて聞いたことがないよ」

「それに、首を絞めた後に首を切り落としたいうのもよくわからん
な。そんなシチめんどくさいことせんでも、首を切れば人間は簡単
に死ぬのに…」

「確かに。でも紅蘭。たしか紅蘭とアイリスが死体を見つけたと
き、確か首はその時点ではもうなかった、って言ってたよな」

「ああ。あのお巡りはんや村人たちが信じたかどうかはわからんけ
どな」

「つまりその時点でもう犯人は死体の首を切り落として、あの場所
においておいた、と言うことになるな」

「それがどうかしたんか？」
「だとすると犯人は何でそんなことをしたのか、だよな。なんか今
回の事件は犯人が自分のしたことを誰かに知ってほしい、と言う気
がしてならないんだよなあ」

そう言つと大神はまた考え事をする。

…すると、

「…行ってみるか」

「行ってみる、って、どこへや？」

「あの神社だよ」

「神社、って…」

「どうもよくわからないことが多すぎるんだよ。今回の事件は。現場百回、って言うじゃないか。もしかしたら新しい手がかりが見つかるかもしれないしな」

「…ほな、ウチも行くわ」と、

「それじゃ私もいこうかしら」

「お兄ちゃん、アイリスも行っついていい？」

あやめとアイリスも言い出した。

*

そして4人は神社へとやってきた。

さすがに暑い夏の午後、と言うこともあつてか神社には誰一人としていない。

その神社の境内で祭りの準備が進められている途中なのか、あちこちに祭りに使う道具が置かれている。

「さ、行きましよう」

あやめがそう言うのと紅蘭とアイリスが階段を昇りかけるが、大神は階段の前で立ち止まったままだった。

「…どうしたんや、大神はん」

「…あやめさん、確かアイリスと紅蘭がここに閉じ込められていた日にこの階段で血痕を見つけましたよね」

「…そういえばそうね。あの血痕を見て私も大神くんも一瞬二人が何かの目にあつたのではないか、って思ったくらいなものね」

「でも結局、二人はただ縛られて転がされているだけで血も何も出ていなかった…。となるとあのときに見た血は田村の血、と言うことになるんでしょうが、となると犯人は別の場所で殺して、ここへ運んできた、と言うことになりますよね」

「本当ね。ここの神社は結構高いところにあるのに、何でわざわざそんなことしたのかしら」

そして4人は階段を上っていった。

*

そして大神は紅蘭とアイリスが閉じ込められていた建物の前に立つ。

事件からまだそれほど日も経っていない、と言うこともあってか、まだアイリスと紅蘭が監禁されていた建物の中も整理が終わっていないようだった。

と、

「…あ、これは大神さん所の…」

この神社の神主が大神に話しかけてきた。

「…どうしたんですか、神主さん」

「あ、いや。さっき警察の人にも話したんですけれど、ちょっと思い出したことがあります」

「思い出したこと？」

「ええ。そういえばここ数日の間、誰かが夜になってこの神社に来ていたことを思い出しましてなあ」

「夜になって？」

「ええ。神社の本殿とか、よろい武者の鎧が置いてある部屋とか、そう言えばそちらのお嬢さんたちが閉じ込められていたこの建物の様子を覗いていたようですよ」

「…覗いていた？」

「ええ。何やつてるのか、と思っていたんですがね」

「…もしかしたら、下見をしていた、と言うことか…？」

「下見？」

「いえ。なんでもないです」

もしかしたら犯人は最初からこの場所を使うつもりで下見をしていたのではないか、大神はそう直感したのだ。

「…ところで、その人物が誰か、とかそういったことはわかりませんか？」

「いやあ、暗かったですからねえ。人相まではわからんのですよ。ただ…」

「ただ？」

「背格好が田村さん所の息子さんに似ていたような気がするんですよ」

「田村の？」

「ええ。人相まではわかりませんでしたけれど、仕草とかが田村さんの所の息子さんによく似ていたような気がするんですが…」

そのときだった。

「だとしたら…」

大神の脳裏にある一つの可能性が思い浮かんだ。

「…そうか、それならば説明が出来る！なぜ紅蘭とアイリスが縛られて監禁されたただだったのかも、犯人が死体の首を切断したのかも納得できる！」

「…どうしたの、お兄ちゃん？」

アイリスが大神に聞く。

「…わかったんだよ。今回の事件の真相が！」

(第6話に続く)

第6話

神社を降りたときだった。

「あやめさん、すみません」

大神があやめに話しかけた。

「どうしたの、大神くん」

「ちよつと帰りに寄りたい所があるので、先に家に帰ってきてくれませんか？」

「大神くんがそう言うならそれはかまわないわ。さ、アイリス、紅蘭。行きましょう」

そしてあやめが二人を連れて帰るのと反対方向の道を大神は歩いていった。

*

村の駐在所。

「ごめんください」

大神が呼びかけると、中から警官が出てきた。

「あ、大神少尉。どうしたんですか？」

「ちよつとお願いがあつてきたんですが…」

「うーん。それだけの施設となるとこの辺にはありませんねえ」

大神の話聞いた警官はそう言う。

「まあ、もともとはここは駐在所ですからね。…それじゃあ、何処にありますか？」

「隣の町の警察にそういうのを調べるところがありますが。今から頼むとなると明日になってしまいますねえ」

「それはわかってはいるんですが…。どうしても確認して欲しいんですよ」

「わかりました。出来るだけ早く調べるようお願いします。おきますよ。早ければ明日の朝にはわかると思います」

「有難うございます！」

*

そして翌日の朝のことだった。

「親父、ちよつといいかい？」

庭で水撒きをしていた父親を大神が呼んだ。

「どうしたんだ、一郎？」

「いや、ちよつと頼みがあるんだ」

そして10時を少し回った頃のことだった。

「あやめさん、ちよつといいですか？」

「どうしたの？ 大神くん」

「いえ、今から神社のほうに来ていただけませんか？ 勿論紅蘭と

アイリスも一緒に」

「でも大神くん……」

「わかってますよ。我々は明日帝劇に帰るから、その準備もしなければいけないでしょうけど、その前にどうしてもひとつ片付けておきたいことがあるんですよ」

「片付けておきたいこと？」

「ええ。今回の事件のことです」

*

そして神社。

大神たちがそこに着くと既に何人も村人たちが集まっていた。

「……一体何なんですか？ 我々をこんなところに呼び出したりして」

村人の一人が大神に聞いた。

「……今回の事件の真相を皆さんにお話しようと思ひまして」

「事件の真相だつて？」

「まだ犯人も見つかっていないのに、か？」

「田村さんの所の息子と西田さんの所の息子が死んだ、となると残った横川さんのところの息子が犯人じゃないのか？」

村人たちがざわめく。

そんな村人たちを見ながら大神は、

「…今回の事件は、あるひとつの言葉が今回の事件の鍵となっているんですよ」

「その、ひとつの言葉、って何なの？」

あやめが聞くと、

「その言葉とは、『落武者の呪い』ですよ」

「『落武者の呪い』って…、あの村人たちが落武者殺して首をさらし者にした、言うあれか？」

紅蘭が聞く。

「ああ。それだよ」

「…まさか大神はん、今になって『実は今回の事件は落武者の呪いだった』なんて言わへんやろな」

「まさか。言つただろ？ 『オレだって呪いなんてものは信じていない』って。でも今回の事件、その『落武者の呪い』と言う言葉が事件を解く鍵となるんだ」

「事件を解く鍵、って…」

「…その前にまず、今回の事件はオレにはどうしてもひとつだけ判らなかつた部分があつた。でも、逆に言うとそれさえわかれば後の事件の真相もわかつたも一緒なんだよ」

「…それで、その大神くんの言う、わからなかつた部分、って何なの？」

あやめが聞くと、

「…実は、最初の事件の後、何故アイリスと紅蘭が神社の中に縛られて転がされていたのか、オレはこのことばかり考えていたんだ」

「…そりゃあ、ウチらが逃げ出せないようにするためやろ？」

「そうかな？ オレは違う理由があると思うぞ」

「違う理由？ 何や、それ？」

「二人が縛られていたのはとにかく、眠り薬を嗅がせて眠らせていただけ、とはどういうことなんだ？ 犯人にとっては正体がばれる

かもしれない危険なことだったんだぞ。だから、アイリスと紅蘭は殺されたっておかしくはなかったんだ」

「殺されてもおかしくない、って……」

「…そうなんだ。二人にはどうしても死んではほしくない理由があったんだ」

「その、理由って何なの？」

アイリスが聞くと、

「それは、二人に目撃者になってほしかったからだ」

「目撃者？」

「二人が神社の中で見た、という田村の首なし死体だよ。犯人はわざと二人を目撃者に仕立てあげたんだ」

「目撃者に…仕立てあげた？」

「そう、これで犯人の犯行は第一関門を突破するんだ。あの死体を田村だと思わせることだな……」

「思わせること？」

「…もし、あれが田村の死体じゃなかったとしたらどう思う？」

「死体じゃない…、ってどういうことや、大神はん！」

「あれは田村の死体だったんじゃないのか？ いや、少なくともオレはそう思う」

「た、田村はんの死体じゃないって…。何を言うてるんや大神はん！ あれは確かに田村はんの死体やったで！」

「なぜそう言い切れるんだい？」

「そりゃあ…、あの死体、田村はんの服着とつたからや。な、アイリス」

「うん」

「でもオレとあやめさんが神社に行つて二人を見つけたときには死体はなかった」

「…そうよね。階段や床が血塗れになっていただけよね」

「これがどういうことを意味するのか？ オレはこう思うんだ。あれは別の死体に田村の服を着せただけの偽装工作だとばれないよう

にするためじゃないか、つてね」

「偽装工作？」

「ああ。犯人が首なし死体に仕立て上げたのもこの理由なんだ」

「この理由、つて…」

「もし現場に首のない死体があったとしたら、まず身元を確認するために被害者の服とかを見るだろ？ それしか身元を確認する方法がないんだしね。犯人はそれを計算した上で、死体に偽装工作を施したんだ」

「…でもなんで、偽装工作をするために、そんな首なし死体にする必要があつたんや？」

「…そこで、犯人は例の『落武者の呪い』を利用したんだ。…紅蘭覚えているだろう？ オレたちがここに来た晩に紅蘭たちが見た、と言つ鎧武者を？」

「あ。ああ。それはおぼえとるわ」

「あれはおそらく犯人が事件を『落武者の呪い』と思わせることにするためにやったことだと思う。そうすれば例え、のろいなんか信じていない、と言う人だって、その後で首なし死体が見つけたら誰だつてもしかしたら…、と思うだろう？ …勿論、これには首を切り落とすことで被害者の身元をわからなくさせる、と言つ理由もあつたんだ。だから犯人は『落武者の呪い』を利用することで、事件を混乱させることが出来た…」

「…となると犯人は…」

と、そのときだった。

「あ、大神少尉」

大神の元に一人の警察官が駆け寄つてきた。

「…なんでしょうか？」

「昨日言つてた指紋の結果が出たんでお知らせに来たんですよ」

「それで？」

「…結果によるとあの最初の死体の指紋と田村さんのところから採

取した息子さんの指紋は別のもの、と言う結果が出ました」

「…やっぱり、そうだったか」

「やっぱり、って…。大神はん、何で死体が田村はんやない、と思
うたんや？」

「昨日、このお巡りさんから『死体が着ている服がちよつとぶかぶ
かしていた』と言う話を聞いたんだ。そうだろう？ 普通は自分の
体に合わないような服を着る人なんていないからね。それで指紋を
取ってもらうように頼んだんだ」

「指紋を？」

「確かに首を切ったり、服を着せたりして死体が田村だということ
を思わせるのは可能だろう。でも、指紋までは変えることはできな
い。紅蘭、君なら人間には一人一人にそれぞれ違う指紋があるのく
らいは知ってるだろ？」

「そ、それ位は知つとるわ。犯罪捜査にも指紋は役に立つんやろ？」

「ああ。指紋つてのは誰一人として同じものをもつ人がいないから、
それが決め手となるんだ。日本でも明治の終わりごろから指紋によ
る捜査をやっているんだよ。田村の家から彼の指紋が取れたのは本
当に幸運だったけどな」

「このあたりじゃそれほど設備が整つてるとは思えないけど、念に
は念を入れた、というわけね」

一説には指紋のパターンは六百四十億ともそれ以上とも言われて
いるようだが。

しばらくたつて紅蘭が、

「…じゃあ、大神はん…」

「ああ。となると、考えられる可能性はひとつだ」

「…じゃあ、犯人は…」

あやめが聞く。

「ええ。最初の犠牲者と思われていた田村ですよ」

そのとき、なにやら神社の外でガサツ、という音がした。

「…誰だ！」

大神が叫んで外に出ると、何者かが階段を降りていく姿が見えた。
「まさか、田村か？」

そう言いながら大神もあとを追っていった。

それに少し遅れながらあやめたちも付いていく。

「…駐在さん！」

「は、はい。すぐに応援を要請します！」

そして村人たち大神たちの後を追っていった。

*

どのくらい走っただろうか。

不意に大神たちは、追っていた者を見失ってしまった。

「…しまった、見失った！」

紅蘭が辺りを見回す。

「…こうなったら二手に分かれたほうがええんやないか？」

「よし、そうしよう！」

「…紅蘭、いらっしやい！」

あやめの声に紅蘭が頷くと、二人は左の方向に走っていった。

「よし、アイリス。行くぞ！」

「うん！」

そして大神とアイリスは右の方向に走っていく。

大神とアイリスはしばらく走ったが、やはりアイリスはまだ10

歳、ということもあってか、次第に大神に遅れを取るようになり、

二人は数メートル離れて走っていた。

と、不意にガサガサツ、と音がしたかと思うと、

「キヤーツ！」

アイリスの悲鳴が聞こえた。

悲鳴のした方向を振り向く大神。

「…アイリス！」

「…おっと、大神。動くなよ！」

そう、一人の男がアイリスを後ろから抱きかかえ、彼女の胸に包丁の切っ先を向けていたのだった。

「…やっぱりお前が犯人だったのか、田村！」

そう、その男こそ大神が今回の事件で犯人だと推理した田村だったのだ。

「…ああ、その通りだよ。オレが西田と横川を殺したんだよ！」

悲鳴が聞こえたので駆けつけたあやめと紅蘭も目の前の光景を見て絶句した。

「あ、アイリス！」

慌てて紅蘭が近寄ろうとしたが、それをあやめが押しとどめた。

「…アイリスに何かあったら大変だね。とにかく、ここは様子を見ましょう」

「は…はいな」

「一体なぜ…、なぜ二人を殺したんだ？」

「…大神、お前も話は聞いたはずだ。去年の夏にオレの妹が首を吊って自殺した、って言うのを」

「あ、ああ。それがどうし…、まさか！」

「…どうやらわかったようだね。妹が自殺したのはあいつらのせいなんだよ！」

「…西田と横川がどうかしたのか？」

「去年の今頃、そうあれは祭りがあった夜のことだった。あの夜、オレはちよつと用事があつて家を出ていて、妹が一人で祭りに行つたんだ」

「…それで？」

「…そこまでいえばわかるだろう？　西田と横川のヤツは妹のことを…」

それ以上のことは言われなくてもわかる。おそらく二人は田村の

妹のことを暴行したのだろう。

「…妹が家に帰ってきたのは真夜中をとくに過ぎていた時だ。勿論、何か変だな、とは思ったぜ。でも妹はオレやお袋が話しかけても何も答えず、そのまま部屋に閉じこもったんだ。チキシヨウ、あのときに気付いていればあんなことには…」

「…それでどうしたんだ？」

「妹は次の日になっても部屋を出なかった。そしてその日の夜、何も言わずに家を出て行ったんだ。オレたちが気付いたときには妹は何処にもいなかった。村人も一緒になつて探してくれたんだ。そして…妹が見つかったときには…」

おそらくその時に田村の妹は自ら死を選んだであろうことは大神も理解した。

「…勿論オレだつてなぜ妹が自殺したのかはわからなかった。でも、妹の部屋からオレ宛の遺書が見つかったときにすべてを知つたんだ。そのときからオレはいづらへの復讐を誓つた。しかし、すぐにはやらなかった。妹が死んだ頃と同じ、夏祭りのときに殺そうと決めていたんだ。この1年、本当に長かつたぜ」

「…じゃあ、なぜ『落武者の呪い』なんか利用したんだ？」

「…知つてるだろう？ オレたちの先祖が例の『落武者を殺した村人たち』だつてことは。そんな連中が、逆に首を切り落とされた死体で見つかったらどうなると思う？ 誰だつて『落武者の呪いだ』つて思うだろう？ オレはそれを利用したんだ」

「じゃあ、神社の鎧を盗んでそれを着て暴れまわつたのもお前か？」

「ああ。村人たちに『落武者の呪い』と言うのを印象付けるためにな。…それもあつてオレはこの1年を待ったんだぜ」

「田村…」

大神がその場に立ち尽くすだけだつた。

「…田村、大切な妹をお前の気持ちはわかる。もしオレがお前の立場だつたとしても同じ気持ちになるだろう。でもな、だからって…、だからって人を殺していいと思つてんのか？ こんなことをして本

当にお前の妹が喜ぶと思ってるのか？ お前の妹はお前にこんなことをして欲しくなかったんじゃないのか？」

「…わかってる！ そのくらいはわかってるさ！ でもな、もう遅えんだよ！」

「田村、もういい。もういいじゃないか！ …頼む、とにかくアイリスを放してくれ！」

「…そうは行くか！ 何か変なこととしてみる。このガキの命はねえぜ！」

「く…」

大神はその場に立ち尽くしたままだった。

そのときだった。

アイリスがキツ、と田村の持っていた包丁を睨みつける。

と、何かに操られるかのように、自分の胸元に突きつけられていた田村の包丁が勝手に彼の手を離れ、近くの木に突き刺さった。

「…まさか！」

大神は自分の身を守るためにアイリスが「力」を使った、と直感した。

「あ…」

完全に不意を突かれたか、一瞬田村がきよとんとしたのを大神は見逃がさなかった。

「田村あ！」

そう叫びながら大神が突進し、田村に体当たりを食らわし、あつと言う間に組み伏せた。

その間に田村の手を離れたアイリスは無事にあやめたちが助け出していた。

「アイリス、怪我ないか？」

紅蘭が聞く。

「う、うん。アイリスは大丈夫だよ！」

そうしている間にも大神に加勢した警官の手によって田村の手に

手錠がかけられていた。

「…大神少尉、ご協力感謝します」

「いえ、こちらこそ」

*

程なく村人たちや応援の警察官が駆けつけ、彼らに田村が引き渡された。

「…しかしまあ、あれはなんだったんでしょね？」

警官が不思議そうに大神に聞く。

「あれ、と言いますと？」

「ほら、田村さんが持っていた包丁が何で急に彼の手を離れて近くの木に刺さったんでしょね？」

どうやら警官はアイリスの持っている「力」に気がついていないようだった。

「さ…さあ、どうしてでしょうね？ 手が滑ったんじゃないですか？」

「手が滑った？ それにしてはあんなに飛ぶとは思えません…」
「そういいながら首をかしげる警官。」

「…よかつたの、大神くん？ あんな事言つて…」

あやめが大神に小声で話しかける。

「…いいんですよ。本当のことを話しても信じてはくれないだろうし、アイリスの持っている『力』のことは余り人に話さないほうがいいと思いますよ」

「…それもそうやな。大神はんの言う通りかも知れんわ」

紅蘭も言う。

それを聞きながらアイリスはなにやら意味深な微笑を浮かべている。

「で、これからどうするの、大神くん？」

あやめが大神に聞く。

「…そうですね。どうやら無事お祭りも出来そうだし、明日は帝劇に帰るんだから、折角だから今夜のお祭りを見物してから帰りましょうか。アイリスが一番見たがってたしね」

「うん」

(エピソードに続く)

エピソード

上野に向かつて蒸気鉄道が走っていた。

その中のある車両。

アイリスと紅蘭の二人が並んで座っていた。

「…よく眠っているわね」

そんな二人の姿を見てあやめが隣に座っている大神に言う。

「そうですわね」

そう、アイリスも紅蘭も今までの疲れが出たのか、4人が蒸気鉄道に乗り込み、発車してまもなく寝息を立てていたのだ。

「…やっぱり二人ともいろいろな出来事があつて疲れてしまったのかも知れないわね」

「そうかも知れませぬね。正直言つて自分も疲れましたよ」

「…あんな事件があつたから？」

「ええ」

「そう…」

そう言つとあやめはしばらく黙っていたが、

「…ねえ、大神くん」

「何でしょうか？」

「…やっぱり、ショックを受けてる？」

「…受けていない、つて言つたら嘘になりますね」

「そうよね。私だつて友達があんな事件を起こした、なんてわかつたらショックを受けるわ」

「…でも、正直言つて来てよかった、と思いますよ」

「…どうして？」

「だって、あの夜に行われた祭りでアイリスがあんなに大喜びしていたんですから」

「そうね。私もあんなにはしゃいでいるアイリス、久しぶりに見たわ」

*

事件もひと段落ついた、と言うことで、その日の夜に予定通り落武者慰霊の祭りが行われ、大神はアイリスが見たい、と言っていたので4人で見物に行くことにしたのだった。

大神が祭りに出かける準備をしていたときだった。

不意にふすまが開くと、

「お兄ちゃん、似合う?」

と、浴衣姿のアイリスが大神の前に現れた。

「…どうしたんだ、アイリス、その浴衣?」

「大神くんのお父さんが貸してくださったんですって」

アイリスに付き合ってたか、アイリスの傍らにいたあやめが言う。

「…親父が?」

「ええ。何でも大神くんの妹さんが昔着ていたのがたまたまあったから、アイリスに貸してくださったそうよ」

「…よくそんな前が残ってたなあ…」

大神が言う。

とはいえ、アイリスが小柄なこともあってか、浴衣自体はアイリスの体型にちゃんとあっているようだ。

「お兄ちゃん、早く行こう!」

「…そうだな、それじゃ行くか」

ああいう事件があったにも拘らず、祭りの会場の神社に向かう階段はひっきりなしに村人たちが行き来していた。

「…何だか、あんな事件があったなんて嘘みたいね」

あやめが大神に言う。

「そうですね」

しかし大神はまた、別のことを考えていた。

(…去年、このあとに田村の妹が自殺した、って言うんだよね…)
そう、この村に来たその日の夜に聞いた話を大神は思い出してい

ただ。

(…まさか田村の妹も、帰り道にあんな目にあつとは思っていなかっただろうな…。そしてもしあんなことがなかったら…)

「…大神くん、大神くん?」

あやめが大神に話しかける。

「…え? あ、どうしたんですか?」

「…どうしたって聞きたいのはこっちのほうよ。さっきから考え事しちゃって」

「え? いや、なんでもないです」

「そう、そうならいいんだけど」

(…そう、オレは今回の事件を一生忘れることは出来ないはずだろうな。そしてこれからこの祭りは、オレにとっては、理不尽な理由で殺された落武者たちと一緒に、横山や西田、そしてやつらの身勝手の手で自ら命を絶ってしまった田村の妹のことを、慰霊する祭りになるのかもしれないな)

と、

「お兄ちゃん、早く!」

階段の途中で、アイリスが呼びかける。

「ほらほらアイリス。あんまり急ぐと転ぶでえ」

そついいながら紅蘭が後から追いかける。

そんな二人を見ながら大神たちも階段を昇っていった。

*

「う…、う…、う…」

不意に紅蘭が目覚めると大きくあくびをした。

「あ、大神はん、あやめはん。あとのくらいで上野に着くんや?」

「…そついいばそろそろ上野に着きますね」

「そうね、降りる準備をしなきゃね。…アイリス、そろそろ着くわよ」

「う…、う…、う…」

あやめに言われてアイリスが目を覚ました。

そして蒸気鉄道が上野駅に到着し、次々と乗客が降りていく。大神たちもホームに降り、乗換えをするために歩き出したときだった。

「おっ、隊長」

そう言いながら頭陀袋を肩にかけたカンナが4人に近づいた。

「カンナ、修行は終わったのか？」

「…まあな。昨日、米田支配人に電話で聞いたら、この蒸気鉄道で帰ってくる、って言ってたんでね。ちょうどあたかも同じくらいの時間に上野に着くからついでに、と言ってはなんだけど迎えに来た、ってわけさ」

「そうか、悪いな」

「まあ、土産話は帝劇で聞くとして…、まずは、お帰り」

「…ただいま」

(終わり)

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7671b/>

落武者伝説殺人事件

2009年6月17日15時32分発行